



ひょうごの遺跡

平成22年(2010)
2月22日発行

74号

兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 TEL079-437-5589 FAX079-437-5599
ホームページアドレス <http://www.hyogo-koukohaku.jp>

平成21年度上半期

発掘調査の成果



1

古墳時代の水辺の祭祀場 有年原・クルミ遺跡

赤穂市有年原

有年原・クルミ遺跡は、弥生時代後期（3世紀）から古墳時代中期（5世紀）に続く集落跡ですが、その一画で素掘りの井戸を発見しました。今でもこんこんと水が湧き出るこの井戸の周囲には階段のような段を設け、杭列によって周囲と仕切られています。全国で確認されている同様の例から推測し、古墳時代後期（6世紀後半）にこの地を治めていた豪族が執り行った水の祭祀に関連した遺構と考えられます。



今も湧く井戸

井戸から流れ出た水を川に導くための溝の中から土器がまとまって出土したことから、溝の岸にも祭祀のための土器が置かれていたと考えられます。また、井戸を挟んだ反対側には柱列が2列に並んでおり、建物跡となる可能性があります。このように、建物とその前面の井戸、さらには井戸から湧き出る水を排水するための溝となって、祭祀の場を構成されています。

この溝からは、土器の表面に篋で絵を描いた絵画土器が出土しました。土器は小さな破片のため絵画の全体を知ることはできませんが、鳥やスッポンの頭部ではないかと想像されます。

これとともに水田跡の調査を行いました。下層の水田跡は平面形が不定形であり、現在も遺跡の周辺に残る長方形の条里型の地割りと異なった形状となっています。また、この下層水田面を覆う洪水堆積層が奈良時代後半であることから、遺跡周辺の条里制がそれ以降に施工されたことが確認できます。



井戸と柱列



絵画土器



大溝からの遺物出土状況



遺跡の空中写真



水田跡

沖代遺跡は揖保郡太子町沖代に所在する縄文時代晩期（紀元前2～3世紀）から平安時代（12世紀）にかけての集落跡です。県道網干停車場新舞子線の建設に伴い176㎡の範囲の発掘調査を行い、多くの成果を得ることとなりました。

その1：弥生時代後期（3世紀）の集落を囲むように大溝（環濠か）が巡らされていました。

その2：竪穴住居跡からなる集落が古墳時代前期（4世紀）に築かれ、その後期（6世紀）まで続きます。

その3：鎌倉時代（12世紀）には掘立柱建物跡からなる集落が出現します。

その4：江戸時代（18世紀）には耕作地（水田）になります。

沖代遺跡周辺には、弥生時代後期から古墳時代にかけて注目される遺跡が多く存在しています。竪穴住居跡などの遺構が非常に多く密集し、地域の中心的な集落であったと思われる和久遺跡、大和の影響を強く受けた庄内型式の甕（かめ）を保有する鵜（いかるが）遺跡、讃岐地方の土器を持つ川島遺跡などがあります。大津茂川流域（あるいは西播磨地域）最初の王墓と思われる丁瓢塚（よろひさごづか）古墳も築かれています。

弥生時代から古墳時代にかけての考古学的研究をするには最適な地域であり、沖代遺跡もこの時代のムラで鵜ムラなどから分村したものと思われます。



調査区の全景



竪穴住居跡



出土の土器



調査風景

津万遺跡群は一般国道175号西脇北バイパスの建設に伴い、平成16年度から発掘調査を実施しています。今年度の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の大溝・竪穴住居跡6棟以上、平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物跡8棟以上・集石土壌（しゅうせきどこう）・土壌墓（どこうぼ）・木棺墓などが見つかりました。

特に、土壌墓から出土した化粧道具のセットや木棺墓から出土した烏帽子（えぼし）は、非常に珍しい遺物です。建物跡やこうした墓などの集落の構成要素から考えると、この地域における在地領主や荘官などの有力者の存在がうかがえます。



3 E 区 全景



3 E 区 竪穴住居跡



3 E 区 大溝

5 E 区の木棺墓

棺の底板の北端部に歯の一部が残っていたことから、遺骸が北枕であったことが分かります。棺の内部には小刀と思われる鉄製品や漆器碗とともに、県内でも出土例の少ない烏帽子と思われる漆製品などが納められていました。この墓は鎌倉時代（13世紀）頃に、当時の建物の横に作られています。



5 E 区 全景



5 E 区 木棺墓

どこうぼ 土壙墓出土の化粧道具

墓の内部には方形素文銅鏡、鉄製鉋(はさみ)、鉄製毛抜き、刀子、針状鉄製品、串状鉄製品(筭(こうがい)か)、青白磁合子、白磁碗、土師器小壺、土師器小皿が納められていました。造られた時期は、平安時代後半(12世紀)です。鉋や毛抜きなどは、土とともにかたまりとなった状態で出土しましたが、レントゲン写真でその形をはっきりと確認することができました。

鏡・鉋・毛抜き・刀子・針・筭・合子・小壺は、三島大社(静岡県)や熊野速玉大社(和歌山県)に伝わる手箱に納められた化粧道具の構成に近いことから、同様のセットと考えられます。



鏡・鉋などのレントゲン写真

このような化粧道具のセットは、県内で他に多利・前田遺跡(丹波市)の土壙墓(どこうぼ)から鏡・鉋・毛抜き・刀子・青白磁合子・青白磁小壺・白磁皿などが出土し、県指定文化財に指定されています。鏡・鉋・毛抜きを含む整ったセットは近畿地方でもこの2例のみで、大変珍しいものです。

化粧道具は女性のみがもつものではありませんが、特にそれらを納めていることから、女性の墓である可能性が高いと思われます。この地域の有力者と関係の深い女性が葬られたのでしょうか。



3 E 区 土壙墓



土壙墓出土の化粧装具



多利・前田遺跡出土の化粧道具など

有野川右岸の小さな尾根の上から、4基の火葬施設が発見されました。楕円形の穴の中に死者を火葬するための台石が据えられています。左下の写真の石組は、花びらの様です。これは、江戸時代にはよく見られる桶棺（早桶）を既に取り入れて火葬に使用していたためと考えられます。右下の写真からも明らかなように、火葬施設はとても小さなものですが、丁寧に掃除をして繰り返し使用していたようです。今回の調査によって、神戸市北区では戦国時代（16世紀）に一般民衆まで火葬が広がっていたことが明らかとなりました。



石組をもつ火葬施設



規模の小さな火葬施設

伊丹市立南中学校のテニスコートの下から発見されました。直径1m・深さ80cmほどの円形や楕円形の土坑（穴）が25基以上も、密集して掘られています。今回の発掘調査は約300㎡の限られた範囲でしたが、周辺には更に沢山の土坑が存在しているものと考えられます。南町遺跡の周辺には御願塚（ごがづか）古墳を始め、古墳時代中頃（5世紀後半）の古墳が点在しています。今回発見された土坑群は、同時期の土器あるいは埴輪を製作するための粘土を採掘した跡と考えられます。



粘土採掘坑



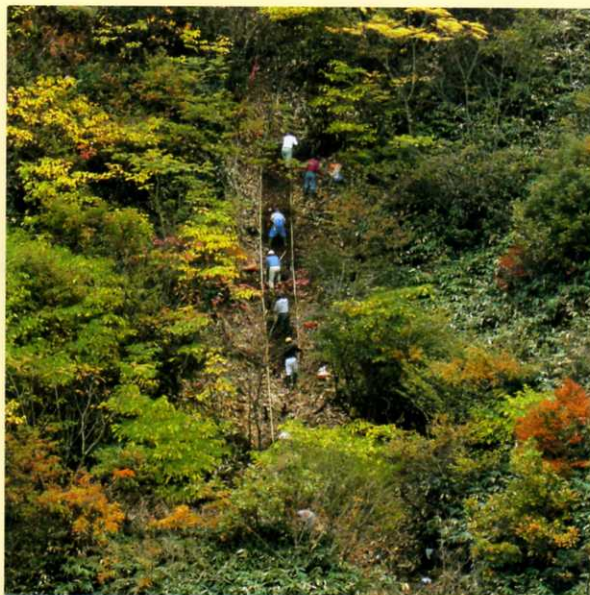
中学生による見学会

『ひょうごの遺跡72号』で分布調査の様子を紹介しました
浜坂道路建設予定地では、次の調査段階となる「確認調査」
を行いました。分布調査で「遺跡がありそうだ!」と特定し
た場所を試掘りし、実際に遺跡が存在するか否かを確認め
る調査となります。

今回の調査地点は、分布調査で古墳や山城と想定された場
所を対象としました。地中に棺・溝などの遺構があるのか、
土器などの遺物が出土するのかなど、遺跡が存在する証拠を
把握することを狙いとしています。

調査の方法は、傾斜の緩やかな山の斜面や平坦地となっ
ている場所など、遺構の存在する可能性の高いと想定される箇
所に、幅1m程度のトレンチ（溝状の調査区）を設けて掘る
ものです。

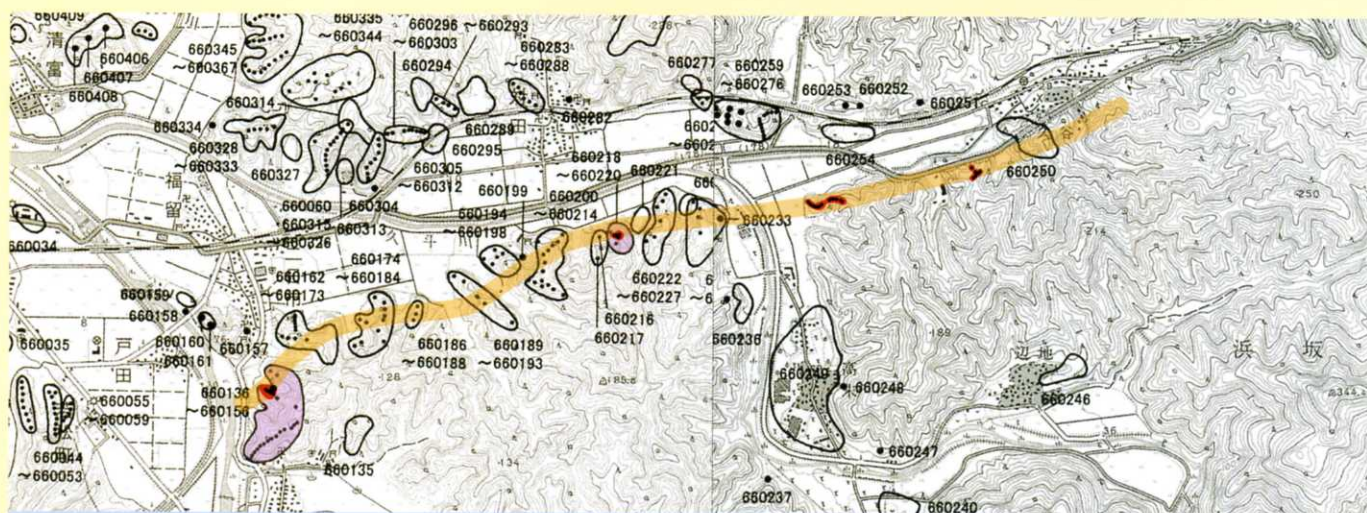
調査に取りかかるため、まずトレンチを設ける場所の樹木
の伐採や下草刈りをはじめ、調査区に行くための通路作りか
ら作業が始まります。しかも、今回の調査地点はほとんどが
山の斜面のため、測量器具やカメラを入れたバックなどの必
要機材を担いで、急斜面の調査区を目指して登ります。調査
の記録を取るため、滑り落ちそうな場所でも図面を書き、写
真を撮る場面もありました。



斜面に設定した調査トレンチ



トレンチ壁面の地層を記録する



道路建設予定地(橙色帯)と調査地点(赤色)

こうした努力の末に、遺跡の存在を確認した時の喜びはひとしお
のものがあります。逆に、遺跡の存在が確認できなかった場合には、
確実にその場所には遺跡がないことを証明するためのデータの整理
が必要となるため、存在した場合と変わらない精度での調査を行う
ことになります。

今回の確認調査により、弥生時代の終わり頃（3世紀）から古墳
時代のはじめ頃（4世紀）に造られた墳墓群や古墳の存在が明らか
となりました。その墳墓群のひとつから、祭祀具の石杵が出土した
ことも大きな成果となりました（次頁を参照下さい）。



ロープや梯子によって確保した通路

平成21年度
企画展

兵庫県発掘調査速報展 2009

期間

平成22年3月20日(土)～4月11日(日)

【月曜日は休館】

● 観覧時間 平成22年3月20日～31日 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時半まで)
平成22年4月1日～11日 午前9時30分～午後6時(入館は午後5時半まで)

● 発掘調査報告会 3月27日(土) 午後1時から(当館講堂にて)

報告遺跡

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 有年原・クルミ遺跡 | 2. 池田古墳 |
| 3. 高松3号墳 | 4. 津万遺跡 |
| 5. 「調査成果をめぐっての討議」 | 6. 平成21年度の発掘調査について |

ちょっと不思議な出土品

L字状石杵

右写真の上に乗っている石は、赤い顔料(朱やベンガラ)を粉末にするためのすりこぎで「石杵」(いしぎね)と言います。この石杵は擦る面が細長く、横から見るとカーブを描いているのが特徴であり、「L字状石杵」と呼ばれているものです。この秋、美方郡新温泉町に所在する弥生時代後期末の木棺墓から出土しました(前頁参照)。

L字状石杵は、弥生時代中期後半(紀元前後)から古墳時代初め(4世紀)に東海地方から九州地方にかけて40点ほどが発見されており、主に集落遺跡から出土しています。弥生時代後期後葉から末にかけてはL字状石杵が激減し、いびつな棒状をした石杵が多くなります。古墳時代にはいるときれいな棒状となり、被葬者とともに古墳に埋葬されるようになります。

鳥取・島根両県では弥生時代後期に石杵をはじめ、敲石(たたきいし)などを棺の上に立てて墓標にする例があります。写真のL字状石杵も、木棺の蓋の上に置かれていたと推定される状態で出土しています。山陰地方の弥生時代後期の墓制風習になぞらえて、墓標として利用されていたものと思われます。



上：L字状石杵(新温泉町対田出土)

下：石臼(宍粟市上比治森ノ上遺跡出土)

編集後記

今回は主に今年度上半期に調査を実施した遺跡の発掘成果をご紹介しました。本発掘調査以外にも分布調査、確認調査も実施しています。浜坂道路の確認調査を担当した調査員はL字状石杵を発掘したのがなんと3つ目で、兵庫県の5例のうち2例を出土した驚くべき「引き」を持っています。担当者には能力以外に「引き」があるようです。このようなめぐり合わせを大切に、心躍るような発見に出会っていききたいものです。皆様も現地説明会や速報展などで新しい発見に接してみてください。



21教 ㊞ 2-041A4